



Data

監督・脚本：ピーター・ランデスマン

原作：マーク・フェルト/ジョン・D・オコナー

出演：リーアム・ニーソン/ダイアン・レイン/マートン・ソークス/トニー・ゴールドウィン/アイク・バリンホルツ/ジョシュ・ルーカス/マイカ・モンロー/マイケル・C・ホール/トム・サイズモア

👁️👁️ みどころ

CIA（中央情報局）が大統領の直轄組織で外国担当の諜報機関なら、FBI（連邦捜査局）は司法省に所属し、国内問題担当の機関。そのため、FBIにはテロやスパイ等の公安事件のみならず、政治家や政府高官の汚職はもちろん、不倫、浮気等のスキャンダル情報もたっぷり！

そこに48年間も長官として君臨してきたジョン・エドガー・フーバーが死亡すれば、その後継者は、有能で忠実かつ人格高潔な副長官のフェルト。誰もがそう考えたが、時のニクソン政権による人事は・・・？

時あたかも大統領選挙の直前。そこで起きたウォーターゲート事件とは？それに対するFBIの捜査とは？

こりゃ必見！そしてFBIの基礎知識は『エドガー』（11年）から。また、同時期に公開される『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（17年）からは、ベトナム戦争をめぐるニクソン政権のもう一つの問題点を、本作と対比して！



■□FBIのフーバー長官が死亡！その後継者は？■□

3月12日付新聞各紙は一面で東日本大震災7年の追悼式典の様子を伝えるとともに、中国の国家主席の任期撤廃のニュースを伝えた。すなわち、中国の全国人民代表大会（全人代＝国会）は、3月11日、国家主席の任期を2期10年までに制限した規定を撤廃する憲法改正案を約99.8%の圧倒的賛成多数で採択。これによって、「毛沢東の大失敗」以降、集団指導体制とされていた国家主席の制度が180度転換し、3期目はおろか終身

制にもつながる可能性が出てきたことになる。

しかして、本作『ザ・シークレットマン』は、かつての毛沢東やこれからの習近平と同じように(？)、FBI(連邦捜査局)長官として48年間も君臨してきたフーバー長官が、1972年に突然死亡したところから物語がスタートする。フーバーがFBI長官として仕えてきた歴代大統領は何と8名。その功績は大だが、そこにはきっとさまざまな弊害も……。フーバー長官の死亡は、時あたかも大統領選挙の178日前だ。2期目を目指していた現職の共和党大統領ニクソンにとっては、間違ってもFBIが握っているさまざまな「不適切な交友関係」等のスキャンダルは漏れてはならないことだ。

フーバー死亡の数日前にジョン・ディーン大統領法律顧問(マイケル・C・ホール)に呼び出され、ホワイトハウス内政担当補佐官室で「フーバー長官をいかにすれば退任させられるか?」という相談を受けたFBI副長官のマーク・フェルト(リアム・ニーソン)はその相談を一蹴し、時の政権とは一定の距離を置いた独立の機関としてのFBIの存在価値を強調していた。しかし、フーバー長官が死亡してしまうと、フェルトはどうすればいいの?フーバー長官が死亡した今、次の長官候補は誰が考えても副長官のフェルトだが、そのためにはニクソン政権と仲良くした方がいいのでは……。?一瞬フェルトの頭にはそんな考えもよぎった(?)だろうが、そこでフェルトが全職員に命じたのは、ただちにFBI内のメモをすべて処分すること。それは一体なぜ……。?

■□ウォーターゲート事件とは?FBIの対処は?■□

2016年9月のアメリカ大統領選挙で、ドナルド・トランプ共和党候補がヒラリー・クリントン民主党候補に勝利したことには世界中がビックリ。ところが、トランプ政権では、2017年5月にFBI(連邦捜査局)のコミー長官を解任したことに端を発した「ロシアゲート問題」が、政権を空中分解させる危険をはらむ大問題になっている。この「ロシアゲート」という言葉は、ニクソン大統領当時の「ウォーターゲート事件」をもじったもの。そして、ウォーターゲート事件とは、1972年6月にウォーターゲート・ビルの民主党本部に何者かが侵入した事件だ。その犯人は逮捕されたが、彼らは誰に命じられて、何を狙ったの?それが大問題になり、FBIやCIAはその捜査に躍起になった。もし、ニクソン政権がこれに関与していたうえ、捜査妨害のために司法長官の解任等をしていたとすれば……。?そこでは、「情報提供者X」という意味で、「ディープ・スロート」という言葉が面白おかしく語られ、独り歩きしていたが、さてその真相は……。?

他方、フェルトの予想に反して、ニクソン政権からFBIの次期長官の代理として任命されたのは司法次官補のL・パトリック・グレイ(マートン・ソーカス)。この人選には、かつての同僚ながらフェルトとは大猿の仲だった、フーバー長官の下で非法な裏仕事を担当していたビル・サリバン(トム・サイズモア)の画策が利いていたのかもしれない。そんな人事が確定した後に起きたウォーターゲート事件について、FBI内部の実務には

詳しくないグレイ長官代理に変わってフェルトが陣頭指揮をとっていたが、ある日グレイから今後ホワイトハウスやCIAへの事情聴取には許可が必要だと告げられたからフェルトはびっくり。「FBIは独立機関だから、その捜査にそんな許可は必要ない」と食い下がったが、「48時間以内に捜査を完了させろ」と逆に期限を区切られ、事実上のウォーターゲート事件の捜査打ち切りを示唆されたから、フェルトはさらにビックリ。ディーン大統領法律顧問がグレイの部屋に来ていたから、そんな処理方針がニクソン政権＝ホワイトハウスの意向であることは明らかだ。さあ、フェルトはグレイ長官代理の指示に黙って従うの？それとも・・・？

■□■本題の前にFBIとは？その役割は？政権との距離は？■□■

イギリスでは近時、『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマルーム28』114頁参照）のようなシリアスなスパイ映画と共に、『キングスマン』（14年）（『シネマルーム37』213頁参照）のようなマンガ的アクションを強調したスパイ映画も流行っている。しかし、一貫して人気が高いのは、やはり「殺しのライセンス」を持った「M16」のスパイを主人公にした『007』シリーズだ。

それに対して、アメリカのスパイ映画では『ボーン』シリーズや『スパイ・ゲーム』（01年）（『シネマルーム1』23頁参照）のような「CIAモノ」が多く、「FBIもの」は意外に少ない。しかし『ブラック・スキャンダル』（15年）は、貧乏で悪ガキだった幼なじみが一方はギャングのボスに、他方はFBI捜査官に、そして弟は上院議員に。という興味深い実話だった（『シネマルーム37』59頁参照）し、レオナルド・ディカプリオが主演した『J・エドガー』（11年）は、1924年から1972年まで48年間もFBIに君臨したジョン・エドガー・フーバー長官の良くも悪くも波乱に満ちた一生を描く素晴らしい映画だった。同作を『シネマルーム28』に未掲載にしたのは「50作」に収めきれなかったためだが、そこではCIAとFBIとの違いをはじめとする、FBIの基礎知識とフーバー長官の活躍ぶりを詳しく評論した。そこで、本作の参考のため、その全文を「別紙」として掲げておく。少し長くなるが、しっかりと参考にしてもらいたい。

■□■フェルトの落胆は？でも仕事は？そして究極の決断は？■□■

世間を揺るがす大事件に一方の主人公として登場し、良くも悪くも社会的に大きな影響を及ぼした人物を映画で描く場合、ややもすればその公的側面のみに目を奪われる傾向がある。それが悪いわけではないが、その主人公、つまり本作ではFBI副長官として30年間もフーバー長官を支えてきたフェルトにも当然、家庭では夫としての側面や父親としての側面もあったから、映画でそのプライベートな側面を描けば、その人物（FBI副長官）の心の中のさまざまな苦悩がより明らかになるはずだ。そんな視点から、本作ではフェルトとその妻オードリー（ダイアン・レイン）との関係や、なぜか失踪しているという

一人娘ジョーン（マイカ・モンロー）のエピソードが登場するので、それにも注目！

夫がFBIに勤務し、忠実にその任務を果たそうとすれば、妻のオードリーは夫と共に何と30回近くの引っ越しを余儀なくされたらしい。それを含めて大変な思いで働いている夫をオードリーが支えてきたのは、いつか夫がFBI長官に立身出世するのではないかという夢があったためだ。しかし、フーバー長官が死亡した今、その後継者は誰が考えても夫のフェルト！フェルト本人以上にオードリーはそう確信していたのに、ニクソン政権の介入（？）による次期FBI長官人事は・・・？

また、フェルトが副長官として長年フーバー長官や部下たちの信頼を集めてきたのは、ひとえにFBIの任務を理解し、有能で忠実な捜査官の鑑として働いてきたため。その高潔さゆえ敵も多いものの、周囲からの信頼が厚いのがフェルトの特長だ。したがって、フーバー長官の死後、突然発生したウォーターゲート事件に対して、フェルトはFBIとして原理原則どおりの捜査を進めているのに、ニクソン政権の介入によって誕生したグレイ長官代理からあんな指示を受けたのでは……。そこで、フェルトが「やってられねーよ」と考えたのは当然だ。こうなれば、いっそのこと退職を……。フェルトも一瞬そう考えたようだが、さて彼の最終決断は？

そんな中、ある日ワシントン・ポスト紙に「ウォーターゲートビルに侵入したのは元CIA職員でその目的が民主党本部の盗聴だ」という記事が掲載された上、タイム誌にも「FBIが真相の隠蔽を画策している」という記事が出るという噂が……。これはFBIのどこかからリークされた情報に違いない。リークしたのは一体ダレ？そんな大問題が発生することに……。FBIには、有能な捜査官のチャーリー・ベイツ（ジョシュ・ルーカス）、ベテラン捜査官のロバート・カンケル（ブライアン・ダーシー・ジェームズ）、毒舌だが顔が広く、情報収集能力に長けた捜査官アンジェロ・ラノ（アイク・バリンホルツ）らがいたが、彼らにも疑いの目がかけられたのは当然。フェルトにはグレイ長官代理の補佐役かつウォーターゲート事件の捜査実務の責任者としてリーク犯をつきとめるべき任務があったが、ひょっとしてフェルト自身がそのリーク犯？FBIとニクソン政権内には、少しづつそんな疑いも……。

■□ 『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』 と対比！ ■□

第75回ゴールデン・グローブ賞主要6部門にノミネートされ、第90回アカデミー賞の作品賞、主演女優賞にもノミネートされた『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』は、スティーヴン・スピルバーグ監督がメルル・ストリープとトム・ハンクスを共演させた骨太の社会派ドラマで、日本では3月30日から公開。しかし、その邦題になっている「最高機密文書」とは一体ナニ？

アメリカでは、ニューヨーク・タイムズ紙とワシントン・ポスト紙がライバル関係にあるが、1971年以降ベトナム戦争が泥沼化していく中、ペンタゴン（国防総省）が作成

していたという「ペンタゴン・ペーパーズ」とは一体ナニ？ある日、その文書が流出したことを突き止めたニューヨーク・タイムズ紙がその内容の一部をスクープしたから、ワシントン・ポスト紙は後れを取ることに。そんな中、それを挽回するべく、ワシントン・ポスト紙のトップで、アメリカ主要新聞社史上初の女性発行人となったキャサリン・グラハム（メリル・スリーブ）と、編集主幹のベン・ブラッドリー（トム・ハンクス）はいかなる手を・・・。

同作はそんな映画だが、本作でもタイム誌の記者でフェルトとは長年の付き合いを続けてきたサンディ・スミス（ブルース・グリーンウッド）とワシントン・ポスト紙の若き敏腕記者ボブ・ウッドワード（ジュリアン・モリス）が登場し、「ある役割」を果たすので、それに注目！近時、我が国で朝日新聞が安倍政権の反発や産経新聞の批判をもとめせずに、「もり・かけ問題」の追及に執念を燃やしているのは、新聞（マスコミ）は「社会の公器」としての役割を果たさなければならないとの責任感からだが、本作で彼らは「社会の公器」としていかなる役割を・・・？

2018（平成30）年3月16日記